

原 著

A.S. Byatt の *Possession* に描かれた学者像

橋 本 信 子

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成 6 年10月16日受理)

Scholars in *Possession* by A.S. Byatt

Nobuko HASHIMOTO

*Department of Medical Social Work
Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-01, Japan
(Accepted Oct. 19, 1994)*

Key words : A.S. Byatt, *Possession*

Abstract

In *Possession*, which won the Booker Prize, A.S. Byatt presents various types of scholars who are doing their research either on Randolph Ash or on Christabel Lamotte, fictional Victorian poets. One day Roland, an unsuccessful research assistant, found two drafts of letters by Ash to an unknown woman. Roland was possessed by the desire to discover the secret of these letters. All scholars in the story are possessed in one way or another. Their “possession” and problems in their attitudes toward their research will be clarified in this paper.

要 約

ブッカー賞を受賞した A.S. Byatt の作品 *Possession* にはヴィクトリア朝時代の二人の詩人、ランドルフ・アッシュとクリスタベル・ラモットを巡って、さまざまな学者が登場する。何の将来性もない研究助手のローランドが、偶然に、アッシュの未知の女性に宛てた書きかけの手紙をみつけ、その女性とアッシュとの関係を究明したいという強い好奇心にとらえられるところから、話は始まる。題名の“*Possession*”はあることに「魅惑される」とか「取り付かれる」という意味だが、本論では、二人の詩人を巡っての、学者達の“*possession*”の種々相とまたその問題点を論じる。

はじめに

英国の代表的な女流作家マーガレット・ドラブルとアントニア・バイアットが姉妹であることは周知の事実である。さらに、この二人の作風がかなり異なっていることもよく知られている。「ドラブルは30年間、我々の生きている時代と我々の生き方を写し出す鏡であった。」¹⁾とアラン・マシが述べているように、ドラブルは直接我々の生きている状況を描き、多数の読者の共感を得た。それに比し、ジョージ・エリオット、アイリス・マードック、及びロマン派詩人の研究者として学究生活の長いバイアットの作品が、必然的に万人向きとは言い難い²⁾、知的レベルの高い、難解な作品になることは理解されるであろう。ブッカー賞に輝いた *Possession* は彼女のこのような特色が余すところなく発揮された力作である。ヴィクトリア朝時代の二人の詩人を巡る話であるところから、随所に、詩を初めとして、日記、手紙、神話や伝説の語り、登場人物の手になる研究書、及び伝記の抜粋など、様々の文学様式が取り入れられていて、著者の並々ならぬ力量が窺えるだけでなく、文学の醍醐味を存分に堪能させてくれる作品でもある³⁾。

ブラウニングをモデルに創作されたヴィクトリア朝時代の大詩人ランドルフ・アッシュの研究に従事する師ブラッカッターの資料収集の手伝いをしている、うだつの上がないパートタイムの研究助手のローランドは、ある日、図書館に保存されていた埃まみれのアッシュの本の間に挟まれていた、女性宛ての二通りの書きかけの手紙を見つける。アッシュらしからぬ、余りに切迫した調子に、一体誰に宛てた手紙かと強い好奇心を覚えるところから話は始まる。手紙の“living words” (p. 8)⁴⁾をまた閉じこめてしまうことがとても出来なくて、悪いことだと知りながら、すぐに返すつもりで、ローランドはその紙きれをポケットに入れてしまう。*Possession* という題名は「魅了」とか、「取り付かれること」と言う意味であるが、ここでローランドはこの未知の女性とアッシュとの関係を究明したいと言う思いに取り付かれたのである。この

作品は、学会の定説ではアンチ・フェミニストとされている、平和で模範的な40年の結婚生活を送った愛妻家の詩人アッシュと、学会の定説ではレスビアンとされている詩人クリスタベル・ラモットの秘められた恋、つまり二人の *possession* とこの二人を研究対象とする学者達の *possession* の様子が、時には滑稽さを交えて描写されている。本論ではこの学者達の種々相を中心に考察したい。

I

ローランドはアッシュの権威者であるブラッカッター教授に博士論文の指導を受けたのだが、それは彼にとって、a discouraging experience であった。どうやら、ブラッカッターは、研究者を育てるのは不得手のようである。彼の性格は次の文章に集約されている。Blackadder was discouraged and liked to discourage others.

(p. 9) そのようなブラッカッターの元での研究生生活に喜びが感じられるはずがなく、同棲相手に、生活費の稼ぎ手であるヴァルさへ、いつまでも芽を出さないローランドに愛想をつかしている。ヴァルはローランドのアッシュへの情熱を全く理解せず、後に、クリスタベルについての情報を得るために、クリスタベルの研究者であるモードを訪ねたローランドに、「死んでしまった詩人に執着しているより、生きている人間にご執心の方がよほど健康的よ。」と嫌みをいったりする始末である。ヴァルの無理解は別として、ローランド自身も自分を失敗者だと感じていて、自信に満ちたモードの前で気後れを感じてしまう。ローランドのような駆出しの学者に、いかにブラッカッターが抑圧的であったかは、無断で研究室を飛び出し、手紙の真相究明の旅に出てしまったローランドに、研究者としての職が他大学から与えられることになった時、好意的な手紙を書き送ってきたブラッカッターに対してさえ、彼の好意は感じつつも、ローランドは完全には警戒心を捨てることができなかったことによく表われている。

...Roland realized that this was

quite possibly a very generous letter — certainly kinder than he deserved. Unless it contained a hidden Machiavellian plan to re-establish contact and then savage him? (p. 469)

しかしながら、ブラックadderとて、順風満帆の研究生生活を送っているわけではない。アッシュの妻エレンが遺稿の多くを寄贈したブリテイッシュ・ミュージアムのかび臭い地下の Ash Factory に籠り、乏しい研究資金に苦しみながら、40年間国外に出ることもなく、アッシュの全集を刊行すべく、日夜仕事に精出している。「こんな良い天気なのに、少しは日光に当たったら?」とのファーガスのからかい半分の言葉に、Oxford University Press は天候のことなど気にとめないから、天気が良いからといって仕事を遅らせるわけにはいかないと答えるブラックadderは、休息ということを知らない。アッシュ関連の文書が国外に流出することを恐れる彼は、目的のためなら手段を問わず、財力に物を言わせて、アッシュ関連の文書及び品物を収集しているアメリカ人のクロッパー教授を誰よりも警戒している。気難かしくはあっても、ブラックadderは自分の身の程をわきまえている。自分の研究生生活が終わると、今までの自分の研究成果がそっくり人の物になることを想像し、「それはそれで良いではないか、アッシュが素晴らしいということを見出したんだから。」と考えたり、テレビで見かけた、フクロウの糞から食べられた生き物を再構成している科学者に、自分の姿をだぶらせて考えたりする。ここには、幾分自嘲的ながら、自分の能力の限界をわきまえて、今までの研究生生活を振り返っているブラックadderの姿がある。

一方、祖先が財を成したおかげで、博物館級の品物に囲まれて成長したクロッパーは、最高級品の洋服を身に付け、高級車のメルセデスを乗り回し、金に糸目をつけず、時には、人を騙すことさえ平気で、アッシュに関係している物ならどんなに小さなものでも、自分が設立した空調設備まで完備された白亜の寺院のようなスタント・コレクションに加えたいという、変質

狂といってもいいほどの強い願望の持ち主である。彼は大勢の人を前に、ハイテクを駆使して講演することが大好きという、大変派手好みの人間でもある。ブラックadderとクロッパーの決定的な違いは、次の文章に明白に表れている。

He believed Mortimer Cropper thought himself the lord and owner of Ash, but he, Blackadder, knew his place better. (p. 29)

自分のやり方に何の疑問も持たないクロッパーは、ひたすらアッシュ関連の品物を獲得することに邁進する。そこには些かの自己反省も入り込む余地はない。

恵まれない境遇にありながら、アッシュのことなら少なくとも他の誰よりも自分の方がよく知っていると、内心秘かに自負しているローランドにとって、自分が偶然見つけた末知の女性に宛てられた手紙に表れた思いもかけない切迫した調子は、大きな衝撃であったのだが、これほど強い好奇心を覚え、本能的にこの手紙の重要性に気づいたのは、今まで彼がアッシュ研究に没頭してきたと言う実績と、彼の優秀な学者としての素質なくしては有り得なかったのである⁵⁾。しかし、従来のアッシュ研究を根底から揺がす可能性を前にしたローランドは、皮肉にも、当時、そしてそれから後もずっと、手紙の秘密を追求している間中、生活苦の余り、研究者としての道を半ば断念しかかっていたのである。手紙の内容から、二人の出合った場所が分かり、そこに出席していた数少ない女性の中から、手紙の相手が詩人のクリタベル・ラモットと特定するのは容易であった。ローランドがクリスタベルの研究者であるモード・ベイリーを訪ねるところから、物語は新しい段階に入る。

II

ローランドが思わず手紙を盗んでしまったことを、初めて告白した相手はモードであった。

“Because they were alive. They seemed urgent — I felt I had to do

something. It was an impulse. Quick as a flash. I meant to put them back. I will. Next week. I just haven't, yet. I don't think they're mine, or anything. But they aren't Cropper's or Blackadder's or Lord Ash's, either. They seemed private." (p. 50)

「学会でのスクープを狙っているんでしょう？」と問うモードに、詩人にゆかりの物を集め回っている、伝記作家を自認するクロッパーのような人間を軽蔑していたローランドは、自分の研究態度について次のように明快に答えている。

"I'm an old-fashioned textual critic, not a biographer — I don't go in for this sort of — it wasn't profit — ..."
(p. 50)

そして、手紙は私的なものだから、秘密のままにしておきたいのだとも言う。モードの指摘は学者なら当然誰もが考えることであって、謝る必要もないのだが、ローランドの欲のない純粹な探求心に、逆に、彼女の方が赤面して謝ってしまう。さらに、クリスタベルのことを知りたくて、遠路自分を訪ねてきたローランドが宿泊費の工面もつかないほど困窮していることに気づかなかった自分の迂闊さに、重ねてモードは赤面するのである。当初、冷たく、近づき難い印象で、ローランドには“a most untouchable woman”のように思われたモードが、実は細やかなやさしい心の持ち主であることが暗示される。初めは、ローランドのした行為を狂気の沙汰のように思ったモード自身も、この手紙の持つ力に虜にされていくのである。

ローランドとモードはアッシュの手紙がきっかけで、運命的な出会いをするわけだが、所属する社会的階層の違い、文無しのローランドに対して、モードは大学の“Women's Research Center”の責任者という、研究者としては恵まれた環境にあるという大きな違いがありながら、この二人には次のような共通点が見られる。

第一に二人の学者としての立場は“a textual

critic”である。モードは今までクリスタベルの生活には殆ど興味を持ったことがなく、彼女が触れた物や、彼女がいた場所には、返って嫌悪感さえ感じていたとローランドに告白するのである。手紙の魔力に導かれて、アッシュとクリスタベルの足取りを実際に追う行動の最中でさえ、二人は次のような会話を交わしている。

"I've never been much interested in places — or things — with associations — ”

"Nor I [Maud]. I'm a textual scholar. I rather deplore the modern feminist attitude to private lives." (p. 211)

しかしながら、アッシュとクリスタベルの足取りを追う現在の彼らの行為が、彼らの学問的立場に全く反しているわけでもないと、モードは次のように述べている。

"Literary critics make natural detectives, You know the theory that the classic detective story arose with the classic adultery novel — everyone wanted to know who was the Father,..." (p. 237—238)

二番目の共通点は二人が子供の頃に、将来自分の研究対象とする詩人の詩に出会っているということである。モードの一家はクリスタベルとは縁続きでありながら、その中でクリスタベルはあまり評価されておらず、文学より、返って、スポーツの方を奨励されて育つ中で、たった一つの短いクリスタベルの詩が彼女に強い印象を与えたという。一方、ローランドの方は母親がアッシュが好きで、アッシュの詩に親しみながら育ったという⁹⁾。いわば、この二人は自分の研究対象の詩人、およびその詩に愛情のようなものを感じているのだ。ブラッカダーが講義の中でアッシュの詩を他の詩人の詩と勘違いして紹介した教師の間違いを、自分には分かっているながら正すことをせず、アッシュに対する

罪悪感からアッシュ研究の道に入ったというのと比較すると興味深い。

三番目の、そして一番重要な共通点は、二人が一見奇妙とも思われるような、「何の欲求も無く、何も求められない状態」を理想とし、何より「清潔な空の部屋の清潔な空のベッド」を望んでいることだ。二人は自分達の願望が一致していることに驚く。

“Sometimes I [Roland] feel that the best state is to be without desire... What I really want is to — to have nothing. An empty clean bed. I have this image of a clean empty bed in a clean empty room, where nothing is asked or to be asked...”

“I [Maud] know what you mean... That’s what I think about, when I’m alone. How good it would be to have nothing. How good it would be to desire nothing. And the same image. An empty bed in an empty room. White.” (p. 267)

この白い清潔な空のベッドは一体何を象徴しているのだろうか？ ローランド自身がこの願望は自分の個人的状況とある程度関係していると認めているように、口論を避ける手段としてベッドを共にするというような状態のヴァルとの生活が、ローランドにとっては不毛のものであるということ、そして、モードは、学会で知り合った自信過剰の鼻もちならないファーガスとの情事で深く傷ついたことが暗示されている。アッシュとクリスタベルを追うにつれて、ヴィクトリア朝時代の抑圧された状況下で燃え上がる二人の情熱に⁷⁾、冷え冷えとしていたローランドとモードの心は癒されていくのだが、ベッドのイメージが意味していることは、現代人の不毛の愛だけでなく、モードが「学者や理論家が陥る症状かしら、それとも、私達だけなのかしら。」と自問していることから分かるように、この二人が様々の思惑の入り乱れる研究者を巻く状況に疲れきっている事実も示されているの

であろう。

III

少し、目を転じて、ローランドの身近にいるその他の学者について考察してみよう。ブラッカッターのアッシュ・ファクトリーの隣で誰からも顧みられず、こつこつとアッシュの妻エレンの日記の編集に既に25年の歳月を費やししながら、未だ完成に至らせていないベアトリス・ネストがいる。ベアトリスはアッシュの詩の虜となり、アッシュ研究を志したが、女性には編集の仕事の方が無難だからと言われ、不本意ながらエレンの日記の編集に取り掛かったのであった。ブラッカッターはエレンを面白味のない人間と考えており、大詩人アッシュに最善の伴侶であったかどうか疑問に思っている。不本意ではあったが、ベアトリスがその仕事に取り組んだのは、一つには、エレンを弁護したいと思ったからであった。ブラッカッターは、ベアトリスのことも同様に少々鈍い人間だと思っている。ところが、ブラッカッターに鈍いと思われているベアトリスは、エレンの日記を読むうち、エレンはブラッカッターの考えているような頭が鈍い人間であるどころか、細々とした日常生活の描写の中に、巧妙に何かを隠していることに気づいたのだった。しかし、周りの男性はみんな自分の迫害者で、自分は無用の人間だと思って暮らしているベアトリスは、信じてもらえないだろうと思って、その発見を誰にも語らない。ベアトリスが日記の編集にこれほどの年月を費やしているのも、無能だからではなく、自分のしていることをエレンが喜ぶかどうか確信が持てないまま、年月を重ねているのである。クロッパーがアッシュとエレンの墓を掘り起こし、一緒に埋葬されている小箱を盗もうと目論んでいることを知っても、隣のアッシュ・ファクトリーのブラッカッターに知らせることもできない。モードにその理由を尋ねられたベアトリスは次のように答えている。

“He [Blackkadder] dislikes everyone but he dislikes me more than most. I’m sick of small humilia-

tions.” (p. 439)

この文章から、ベアトリスが長年に渡って、女性であるが故に、数々の屈辱を耐え忍んできたことが伺われる。ベアトリスは1960年代後半に至るまで女性の研究者が置かれていた状況を、モードに次のように語っている。「何でも一大切な事は何につけ一パブで決められたんですよ。私達女性は呼ばれもしないし、行きたくもありませんでした。私は煙草の煙やビールの臭いが嫌いなんです。でも、だからといって、学部の運営について討論することから締め出されていいわけはありません。私達女性は雇ってもらえただけでも有難いと思ったものです。若いことと、それに、私には当たらないのですが、時には魅力的であることも、悪いことのように思っていました。でも、年を取ると、一層惨めです。ああいう職場では、女はある年齢からは魔女(witch)だと思われるんだと、私は固く信じているんです。」(p. 220—221) クリスタベルを尊敬する従姉妹サビネが自分も作家を目指していると言った時、クリスタベルは励ますどころか、「女性は美しい顔を持ち、日々の平凡なことに喜びを持てるほうが良い。」(p. 344) と答えた。初めはクリスタベルの逆説的答えの真意を悟らず気分を害したサビネだったが、やがて、女性は何事かを成し遂げたら怪物か何かのように思われるのだということを理解するようになったことと、このベアトリスの気持ちには相通じるものがある。また、モードは祖母から、「女は教育を受けすぎると良い妻にはなれない。」(p. 53) と言われて育ち、教鞭を取り始めた頃は頭髪を剃ったように短かく刈っていたが、ファーガスとの関係が続いている間に長く伸びた髪を、今はスカーフですっかり覆って人目にふれないようにしている。ベアトリスと比べると遥かに若い世代のモードであっても、研究者として生きるためには、女性であることは邪魔にしかならず、モードはまるで自分の中の女の部分を殺そうとしているかのようである。

IV

モードを訪ねたローランドは、モードの案内

でクリスタベルの墓を訪れ、偶然の出会いから、クリスタベルが死の日まで過ごした部屋を見ることができ、ついにアッシュとクリスタベルの往復書簡を捜し出す。その時のローランドの気持ちも功名心とはかけ離れたものであったことは、次の文章に表れたローランドの心境から明らかであろう。

He[Roland] felt as though he was prying, and as though he was being uselessly urged on by some violent emotion of curiosity — not greed, curiosity, more fundamental even than sex, the desire for knowledge. (p.82)

人を出し抜きたいという気持ちで二人が行動していたのではないことは、秘かにアッシュとクリスタベルの足取りを追っている間も、二人が絶えず自己反省をしていることにも表れている。二人が確認しあっていることは“professional greed”とは違うということである。しかし、モードはアメリカからやってきた友人のクリスタベルの研究者レオノーラから得た情報を勝手に利用する自分に罪悪感を感じて、“I’m as bad as Cropper and Blackadder. All scholars are a bit mad.”(p.322) と言う。しかし、往復書簡の存在が知られてからは、“Quest”の旅にでたつもり二人は、不本意ながら、追われる身となる。学会の大御所達が動きだしたのである。

アッシュとクリスタベルの往復書簡の存在に気づいたクロッパーは新聞社、ラジオ局、テレビ局、金融会社、大使などに重大発表をする旨の招待状を送り付け、さらに、悪質にも自分が機先を制していることを見せつけて相手を不安に陥れるのが目的で、これみよがしにブラッカッターにまで招待状を送りつける始末であった。国外に流出させてはなるものかとブラッカッターは差し止めを大臣にまで訴えるが聞き入れられなかった。何事につけ、クロッパーの方が遥かに上手であった。手紙の件がテレビにまで取り上げられることになり、ブラッカッターはテレビに出演させられることになったが、権威ある

学会誌に論文を掲載する以外、テレビにもラジオにも無縁であった彼は、それが近づくとつれ、悪夢に悩まされるようになる。放送局からの迎いの車の運転手に、汚いコートで車が汚されるとでもいうような迷惑顔をされ、テレビ局で、派手な服装の二人の女性、司会者とレオノーラと一緒に自分の姿を、“dusty grey between these two peacocks, dusty with face-powder”と感じる。書簡の存在が判ってからクロッパ―やブラッカッターの動きは喜劇の色彩が色濃い⁸⁾。クロッパ―の墓あばきを防ぐための相談の集まりで、弁護士のエウエンは実際に、シェイクスピアを引合いに出して“*This feels like the ending of a Shakespearean comedy.*” (p.482—483) と述べている。

アッシュの詩に親しみ、アッシュが直接自分に語りかけていると感じながら、アッシュの著作を読んできたローランドは、クリスタベル一人が読むことを念頭に置いて書かれた書簡を読みながら、自分が読者として排除されていることに戸惑いを隠せなかった。

He thought about Randolph Henry Ash. The pursuit of the letters had distanced him from Ash as they had come closer to Ash's life. In the days of his innocence Roland had been, not a hunter but a reader, and had felt superior to Mortimer Cropper, and in some sense equal to Ash, or anyway related to Ash, who had written for him to read intelligently, as best he could. Ash had not written the letters for Roland or for anyone else but Christabel LaMotte. Roland's find had turned out to be a sort of loss. (p. 469—470)

“a textual critic”の彼は、アッシュの実生活に肉簿すればするほど、アッシュとの間に距離ができた寂しさを味わうことになった。功名心からではなく、学者としての探求心から真相を追い求め、すべてが明るみに出た今、ローランド

が得たものは喜びではなく、寂しさであった。侘しいアパートの壁のアッシュの2枚の肖像画を見ながら、ローランドは次のように考える。

Roland had once seen them [two portraits] as parts of himself. How much they had been that, to him, he only now understood, when he saw them as wholly distant and separate, not an angle, not a bone, not a white speck of illumination comprehensible by him or to do with him, (p. 467)

すべてを失った時、外国の三大学から、アッシュに関するローランドの論文を高く評価し、招聘したい旨の手紙が届く。今までの自信のなさがこれによって、煙のように消滅してしまうのだが、他の人から評価されることが如何に大切かを、ローランドは感慨を込めて次のように語っている。

How true it was that one needed to be seen by others to be sure of one's own existence. (p. 468)

V

ローランドのふとした発見から、アッシュとクリスタベルの詩の従来解釈は根底から覆されることとなった。バイアットは学会の定説の脆さ、その道の権威者の意見を鵜呑みにすることの危険性を我々に呈示している。研究費が豊富なのは良いことだが、それを邪まな手段を講ずることに平然と利用する、クロッパ―の態度が言語道断であることはいままでもない。彼のように、アッシュの伝記的事実やゆかりの品にばかり異常に執着する態度をバイアットが是としていないことは明白であろう。しかし、埃っぽい研究室から出ることもなく、日光に当たることも稀なブラッカッターのような暮しも健康的とは言いがたい。英国人の著作は英国内で英国人によって評価されるべきだという彼の偏狭な国粹主義は、テレビと一緒に出演したクリスタ

ベル研究家のレオノーラとは対照的である。レオノーラは書簡の良い評論を書くことだけが自分の願いなので、往復書簡はアッシュ研究の権威のブラッカッターに委ね、ブリティッシュ・ライブラリーに保管されるべきであると述べ、さらに、クリスタベルが自国の英国で尊重されるようになって欲しいと言う。レオノーラに引っ張られて、ローランドとモードを探す旅に出たブラッカッターは、研究室から出て、やっと人間的な感情が蘇ったかのように見える。その変化は、従来偏狭で人を正当に評価出来なかったブラッカッターが、最後にローランドの論文を評価し、彼にチャンスが巡ってきたことを喜ぶ姿に見られる。“a textual critic”のローランドが“Quest”の旅に出て、行き着いた先は喪失

感であったこと、しかし彼の論文は高く評価されたことから、バイアットが“a textual critics”の方法論を完璧なものとしているわけでも、またその逆に、否定してしまっているわけでもないことは明白であろう。ベアトリスは抑圧された環境の中で、幾分自虐的になっているようだが、若い世代の女性達—遂にローランドの前にスカーフを外した豊かな髪を見せるモード、モードにはその押し付けがましい友情がやや迷惑に感じられるレオノーラ、さらに、「我々フェミニストは互いに協力的ですから。」と快くローランドとモードにクリスタベルの従姉妹の日記を読ませてくれたフランス人の女性研究者—彼女の姿は我々に、女性研究者が着実に育ってきていることを確信させてくれるものである。

文 献

- 1) Massie A (1991) Electrified by the Hard Idea of Truth. *Weekend Telegraph*, Saturday, August 3, X IX.
- 2) しかしながら、意外なことに、アメリカでもベストセラーになっていることが報告されている。Johnson D (1991) The Best of Times. Books, *New York Review*, Mr 28, 35.
- 3) Thurman は次のように述べている：“It’s one-woman variety show of literary styles and types.”
Thurman J (1990) Books : A Reader’s Companion. *The New Yorker*, November 19, 153.
- 4) すべて頁を付けた引用は次の本からである。Byatt A (1990) *Possession*. Chatto & Windus.
- 5) Parini J (1990) Unearthing the Secret Lover. *New York Times Book Review*, October 21, 9.
- 6) バイアット自身、ブラウニングへの情熱は母親譲りだという。Cassidy S (1990) How to Write a Novel : Start With Two Couples. *New York Times Book Review*, October 21, 11.
- 7) Hulbert A (1991) The Great Ventriloquist. *The New Republic*, January 7 & 14, 47.
Howe F (1991) Love Between Pages. *Commonweal*, January 25, 70.
- 8) Suzanne Cassidy はバイアットがシェイクスピアのコメディの要素 “with the kind of warmth of a Shakespearean comedy” を意図的に導入したことを証言している。
Cassidy S (1990) How to Write a Novel : Start With Two Couples. *New York Times Book Review*, October 21, 11.